大阪経済時評

倒産にもモラルが必要

むかしは企業が滅ぶにも〝美学〟があった。沈没してゆく客船の船長が、最後の一人が救出されるのを見届けてから船とともに殉死するオキテがあった。

石油ショック以後の深刻な不況は、相つぐ大型倒産、大量失業、社会不安の世相などの点で昭和初期の恐慌時代とよく似ていると言われる。

その昭和恐慌の前ぶれとなった象徴的な事件に「鈴木商店」の倒産があった。「鈴木商店」は、大正年間の最盛期には、さん下の企業は六十五社、従業員二万五千人に上り、三井、三菱とともに「天下を三分」したこともある。この大番頭・金子直吉氏のワンマン経営と超積極性から、わずか五十年余りで倒産した。

「鈴木商店」の元社員の同窓会辰巳会の年一回の総会が五月十一日京都東山の料亭でなごやかに開かれた。日商岩井の元社長西川政一氏をはじめ全国から集まったのは、百七十人、平均年令は七十六才という高令者ばかりである。この集まりは多忙で姿をみせなかったが、帝人の大屋晋三社長も辰巳会会員である。

倒産した企業の同窓会が半世紀の今も開かれている秘密は、ワンマン経営が命取りになったとはいえ、金子直吉氏の人間的な魅力にあるようだ。ことしの集まりでは、倒産の修羅場における金子氏の生きざまが、ひとしきり話題になった。金子氏は倒産が決まると、まず取引先に自分の経営のまずさを謝罪し、企業に対して統卒力を失ったことを互直に認めた。そして債権者の被害を少しでも小さくしようと資産の処分に奔走した。社員全員の再就職のためにも気を配り、ライバルの三井や三菱にも頭を下げに出かけたこともあったという。

倒産の処理には、六年有余かかったが、その間金子氏は文字通り寝食を忘れて、ひたすら倒産のあと仕末に全精力を注ぎ同情を集めた。

「鈴木商店」は破産宣告を受けることなく清算会社となって「鈴木商店」の分身、日商や帝人、神戸製鋼所などの再生に尽したのである。鈴木商店が倒産した時、財界人の金子評は私欲のない人であることで一致していたが、死亡の時には、借家住まいに電話が一本しか無かったという。井池や道修町の古老は金子氏の倒産の始末の仕方は戦前の経営者には当り前のモラルだったといっている。

戦前のことだが、船場のセンイ問屋に或る得意先がある日突然大量の返品をして来た。問屋の主人は立腹したが得意先は、間もなく倒産した、大量の返品は、倒産による差押えで問屋に迷惑をかけないように配慮した得意先の好意だった。道修町には、倒産したら軒先に赤提灯をぶらさげて、主人が取引先きに一軒一軒謝まりにゆく習慣があったそうだし、債権者には、私財を処分してでも債権額の三割をなんとか返済するのが一つのモラルだったという。

東京商工リサーチ（大阪）の八田情報部長は、「最近の倒産は経営者が財産を隠したり、社費で経営者の趣味品を買いあさったり目に余るものがある」と話している。会社更生法の適用申請の理由の最初に、外部の経済環境の悪化を挙げ、経営政策の失敗を仲々に認めないそうだ。大阪経済人の自助努力、自力更生の精神は、高度成長の荒廃した人心の中で失われてしまったのではあるまいか。

東洋紡の谷口豊三郎さんが会長をしていたころ、当時名門といわれた企業が倒れ、債権者の中に東洋紡が名を連ねたことがある。その時谷口さんは部下に対して「この程度の金なら東洋紡の名前が入っていた方がよい。もし仮りになかったら東洋紡はうまく逃げた冷たい会社だと思われ世間の信用を失うことになる」という。（和田亮介著「扇子商法」）谷口さんの心境にまでたどりついたら品質も一つの美学だが最近の倒産企業は逃げ足が早い。

無責任な倒産の始末がどれだけ取引先や従業員に迷惑をかけ人間不信を招くかを考えるならば倒産にも倒産の仕方があるといえる。さわやかに倒産の後始末をし、暗い世相に少しでも人間への信頼の芽を植えることも経営者の社会的責任ではないだろうか。（H）

閉幕の日前後の思い出（一）

藤沢義夫

鈴木商店回顧五十年の記念すべき行事も会長さん初め幹事諸兄の並々ならぬ御肝煎りで輝やかしい諸行事を展開されて意義ある年を送りこ、に改めて百年に向って第一歩を踏み出しました。当時日本綜合商社の源流として一際高く頭角を現わしていましたSZKの極く底辺に連らなっていました新米社員の私も齢己に七十五を越え、もう前を向くより後ろを振り返える事の方が多くなりました。そこで御世話になった方々に対し当時の私の仕事の関連に就いて、少しばかり思い出を記したいと思います。若し私の思い違いで間違っていたり、失礼がありましたら御容赦を願います。以下順序不同。

THE TOKYO ASAHI SHIMBUN　（日曜土）　昭和二年四月二日

台銀の融資拒絶から
鈴木商店全く行詰る
八方奔走のやりくり遂につかず
近く債権者會を開く

財界におよぼす
影響は案外少い
債権銀行が有力なため

整理の今後
思ひ切って減資断行
救ふものだけ救ふ

先決

下元健吉さん

私が鈴木商店入社の第一夜を大阪済美寮の下元さんと同室させて戴いた事によって知遇を戴く事になりました。そこで私は下元さんから色々と砂糖に関する知識を授りました。その頃出版されたばかりの『砂糖取引所とその運用』と題する書物を幹旋戴いてむさぼり読んだものです。又定期市場での相場の上げ下げも常に鈴木がリードしていると承わり、その權勢を窺い知らされました。又伊勢の名物赤福餅は精糖の中でも最上級のSKかSAを使っているのでその品質が他を圧倒して評判が良いんだと教わりもしました。そんな勉強の最中に惜しくもお店は倒産。暫くして下元さんは上村支店長さんが砂糖の町塩町に砂糖問屋田屋商店を開設なさるに際し上村さんの片腕として参加される傍私の身の振り方に就いても色々御配慮を戴いた事を感謝しています。幸い私も他に職を見つけましたがそこが毎日多量の砂糖を使用する処だったので、恩義ある田屋商店から砂糖を供給して戴く道を開きました。そんな訳で鈴木商店在職の頃より以上に上村さん下元さんに懇うにして戴くようになりました。上村さんが亡くなられた後も下元さんからは長く続いて御厚誼を戴いています。

柳田義一さん

砂糖部貨物課に籍を置いていました私は東神倉庫（三井）の西倉庫内の派出所で元会計主任の日野誠義さんの息俊夫さんが支店の砂糖部営業課に転出なさった後に支店の経理課にいらした柳田さんを迎え色々と御指導を仰ぐ事になりました。西倉庫での仕事は朝支店を出て当日の出荷量を想定して見合う数量に対する砂糖消費税に相当する国債を供託する為に供託局と